

四 新 聞

秋田県大潟村で5月に開催された電気自動車の省エネレース「2026ワールド・エコノ・ムーブ」(WEM)の遠隔操作部門で、四国職業能力開発大学校(丸亀市郡家町)の学生チームが優勝を果たした。同部門は今年新設されたばかりで、同校チームが唯一エントリー。事前のトラブルを克服して記録を残し、初代チャンピオンとなった。

電気自動車省エネレース

四国職能大 初代王者に

WEMは世界初の電気自動車省エネレースとして1995年にスタート。鉛バッテリーを使う鉛電池部門や水素をエネルギー源とする燃料電池部門に加え、今年は遠隔操作部門や自動運転部門が初めて設けられた。同校は燃料電池部門に出場経験があり、過去2度の準優勝を果たしている。今回優勝した車両「チームさぬき002」は、今春卒業した生産機械システム技術科、生産電気システム技術科、生産電子情報システム技術科の3科の学生が卒業研究として開発。車体やブレーキ、ハンドルの製作、映像転送システムの構築などを各科が分担し、それぞれの専門性を生かして作業に当たった。4月からは新4年生12人が引き継いで完成させた。

新設の遠隔操作部門「開発間に合い」唯一出場



WEMの遠隔捜査部門で優勝した四国職業能力開発大学校の学生たち―丸亀市郡家町

車体には2個のバッテリーは30キ。車載カメラの映像を無線通信で送信し、

離れた場所のコックピットから操作する仕組みで、ドライバーは液晶ディスプレイに映る映像を見ながらハンドルやブレーキを遠隔制御する。

レース前日の試走では、走行中に必要な警告音が鳴らないトラブルが発生。学生たちは図面と回路を照合しながら原因を調べ、レース当日に行われる車検までに修復を間に合わせた。レースは1周500メートルのコースを45分間で何周できるかを競う。同部門への唯一のエントリーとなった同校チームは8周を走行して記録を残し、初代王者の座をつかんだ。

ドライバーを務めた生産機械システム技術科4年の甲斐耀斗さん(21)は「遠隔操作では3秒ほどのタイムラグがあり、運転するのが難しかった。無事に記録を残せて良かった」と喜びを語った。指導した若永慎之教授は「他校は開発に時間がかかったようで、唯一のエントリーとなった。学生たちはよく間に合わせた」とたたえた。現在の4年生も新たな車両の開発を進めており、車高を低くして空気を抵抗を減らすなどの改良を加えながら、連覇を目指している。